

第12回「アメリカ哲学フォーラム」

一般発表&自主企画パネル概要集

一般発表 (15件)

1. 化体 (transubstantiation) をめぐるふたつのプラグマティズム——チャールズ・サンダース・パー
スとウィリアム・ジェイムズの比較
入江 哲朗 (東京外国語大学)
2. 初期ウィリアム・ジェイムズとフランス
山根 秀介 (横浜国立大学教育学部)
3. 純粹経験とは何か——ジェイムズ「意識」は存在するか」再読——
大厩 諒 (中央大学文学部)
4. 田中王堂におけるデューイ哲学の継承と展開【概要掲載無し】
山田 大生 (学習院大学文学部哲学科非常勤講師)
5. ボキャブラリーと「理性の公共的使用」—いくつかの言語論的転回におけるローティの位置づけ
青木 崇 (学習院大学)
6. 根源的実在論と超越論的心理学——真にプラグマティックなカント読解
中村 陽太 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程/日本学術振興会特別研究員 DCI)
7. ナラティブの証言は何を伝えうるのか:「どのようなことか」のスタンドポイント的な問答的知識
佐藤 邦政 (茨城大学)
8. 環境プラグマティズムとヨナス——新しい環境倫理学の構築に向けて
久保 健太 (京都大学大学院人間・環境学研究科 DI)
9. カヴェルの『理性の呼び声』における『哲学探究』解釈について【概要掲載無し】
木本 蒼 (京都大学大学院 人間・環境学研究科)
10. 孤立言語の問いに対するカヴェルの応答
笹倉 暢之 (慶應義塾大学)
11. スタンリー・カヴェルにおける二つの懐疑論の対比をめぐって
太期 勇斗
12. 「分断」が叫ばれる時代における利他教育とは——カベルとレヴィナスにおける懐疑主義と他性を
踏まえて——
井川 雄一朗 (京都大学教育学研究科修士課程臨床教育学コースI回)
13. 恐怖のリベラリズムの見落とされてきた要素: ジュディス・シュクラーの民主主義的エートス論
矢端崇 (国際基督教大学大学院 博士後期課程所属)
14. Coloring reality under the specter of social imaginary: The epistemological argument
contra pragmatism
RODIS Fotios (PhD and postdoctoral researcher in Philosophy, Kobe University)
15. Hippie's "Aspiration" and a Critical Examination of Emerson's Concept of "Aversive
Thinking"
YAN SHUNING (京都大学臨床教育研究科)

自主企画パネルリスト（2件）

1. パースの指標概念の現代的応用～生態心理学、メディア論、人類学の観点から
佐古仁志（東京交通短期大学）、谷島貫太（二松学舎大学）、野澤俊介（北海道大学）、加藤隆文（大阪成蹊大学）

2. 〈ドゥルージアン・プラグマティズム〉の可能性：すれ違いから創造的接続へ
朱喜哲（大阪大学 社会技術共創研究センター）、白川晋太郎（福井大学 教育・人文社会系部門 教員養成領域社会系教育講座）、得能想平（奈良先端科学技術大学院大学 デジタルグリーンイノベーションセンター）、西川耕平（国際医療福祉大学 成田キャンパス）

【一般発表概要】

1. 化体 (transubstantiation) をめぐるふたつのプラグマティズム ——チャールズ・サンダース・パースとウィリアム・ジェイムズの比較

入江 哲朗 (東京外国語大学)

チャールズ・サンダース・パースは 1878 年の論文「いかにして我々の観念を明晰にするか」で、何らかの概念を最大限明晰に理解したいなら従うべき規則を掲げた。これが、後世の哲学者たちが呼ぶところの「プラグマティズムの格率」(the pragmatic maxim) である。パースは例として「硬い」という概念を挙げ、その意味はプラグマティズムの格率によりもっとも明晰になると論じた。ゆえに入門書ではしばしば、プラグマティズムの格率の解説において概念「硬い」が持ち出される。

「いかにして我々の観念を明晰にするか」の、プラグマティズムの格率が提示される直前では、カトリック神学の「化体」(transubstantiation) の概念が引きあいに出されている。カトリック教会の聖餐式において司祭が聖別の言葉を唱え、供え物のパンとワインがキリストの体と血に変化する——この変化にあてがわれる特別な概念が化体である。化体においては、人間に感覚可能な諸属性が何ら変わらないまま、それらを越えたところにある実体 (substance) だけが変わるとされる。パースにとって化体は、プラグマティズムの格率を適用すると無意味と結論づけられる概念である。

筆者の考えでは、プラグマティズムの格率を初学者に解説する際の例として、「硬い」よりも（日本語ではたまたま同音の）化体のほうがいっそう適切である。なぜなら、「硬い」の意味は自分のなかではすでに明晰だという臆見が初学者においてはしばしば強力であるせいで、プラグマティズムの格率を「硬い」に適用することのうまみがいささか伝わりづらいからである。加えて、パースのプラグマティズムとウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムの違いへよりスムーズに議論を進められることも、化体を例にすることの利点である。ジェイムズは 1907 年の著書『プラグマティズム』に、神の臨在を信じる者の人生に化体の概念が効果を及ぼしうる——すなわち化体概念は「プラグマティックな価値」を宿しうる——という趣旨のことを記した（「化体」の語は用いていないものの）。ここには、パースのプラグマティズムからの重要な離反がある。

本発表は、パースのプラグマティズムとジェイムズのプラグマティズムがどう異なるのかを探究するための一助として、化体概念の扱われ方の違いについて考察する。両者の哲学的議論に関する検討のみならず、思想史的背景への照明にも本発表は従事する。化体概念への注目が習慣 (habit) 論における両者の距離の測定に資することが本発表をとおして明らかになるだろう。

2. 初期ウィリアム・ジェームズとフランス

山根 秀介（横浜国立大学教育学部）

ウィリアム・ジェームズが1870年4月30日の日記において、自由意志の哲学を主題とするシャルル・ルヌヴィエの『一般批判試論』第2巻を読んで励まされ精神的な危機を脱したと書いたことは、ジェームズに関する最も有名な伝記的事実の一つであろう。そのおよそ2年後、ジェームズがルヌヴィエの発想源の一つであるジュール・ルキエの著書を送ってほしいと要望した手紙から、両者の直接的な交流が始まる。交流は書簡だけにとどまらなかった。ルヌヴィエの忠実な弟子であり代弁者であったフランソワ・ピロンが編集を務めた学術誌 *La Critique Philosophique*（以下 CP）に、ジェームズはいくつかの論文を寄稿する。最初の寄稿は「主観的方法についての諸考察」（1877）であるが、直接フランス語で CP のために書かれた論文はこれのみで、他の諸論文は他誌に英語で発表されたものをルヌヴィエがフランス語訳して掲載したり、彼によって序文をつけられたりすることが多かった。いずれにせよ、これらの論文内容が基本的にルヌヴィエの哲学に沿ったものであること、後に『心理学原理』（1890）や『信じる意志』（1897）の一部として再録されたことを考えると、初期ジェームズにとってルヌヴィエと CP が果たした役割は大きいことが予想されるだろう（なおジェームズは『心理学原理』を「フランスの唯一の友人」であるピロンにささげており、同じ個所に CP への謝辞も記されている）。

本発表では、CP に掲載されたジェームズの論文、そしてそれらに対するルヌヴィエ（とその周囲の人々）の反応を精査することによって、初期ジェームズの哲学形成がどの程度ルヌヴィエと CP の影響のもとになされたものなのかを見定め、そこからジェームズが受け取ったものだけでなく、ジェームズの独自性がどこにあるのかを明らかにすることを目標とする。理論的には実在を証明することが不可能なものとして自由意志を捉え、まさにそれを信じるという実践においてそれを肯定するというジェームズの立場がルヌヴィエの影響により生じたものであることはほとんど間違いないように思われるが、同時にルヌヴィエのカント主義的な要素の少なくともいくつかは、それが自由意志論と密接に結びつくものでありながら、ジェームズにとって受け入れがたいものであった。そうであるとすれば、ジェームズは必然的に、ルヌヴィエとは異なる仕方で、ルヌヴィエ的な自由意志論を肯定しなけりならなかったはずである。そしてそれこそが、ジェームズを独自の哲学者にしたのではなからうか。

なお、初期ジェームズとルヌヴィエ及び CP との関係という問題に先鞭をつけたのは Mathias Girel であり、本発表は彼の研究に触発されたものである。

[参考文献]

Mathias Girel, "A Chronicle of Pragmatism in France Before 1907. William James in Renouvier's *Critique philosophique*." In *Fringes of Religious Experience, Cross-Perspectives on James' The Varieties of Religious Experience*, edited by Sergio Franzese and Felicitas Kraemer, 2007, 169-200, Frankfurt: Ontos Verlag.

Mathias Girel, "William James and Renouvier's Neo-Kantism: Belief, Experience and Consciousness." In *The Oxford Handbook of William James*, edited by Alexander Mugar Klein, 2024, 467-489, Oxford University Press.

3. 純粋経験とは何か——ジェイムズ「意識」は存在するか」再読——

大厩 諒（中央大学文学部）

本発表では、W・ジェイムズ（1842-1910）の形而上学の根本をなす概念である純粋経験について、共通理解を形成することを目指す。

ジェイムズは1904年から翌年にかけて、自身の哲学を体系的に構築するために複数の専門的な論文を発表した。これらの論文は彼の死後、R・B・ペリーの編集によって『徹底した経験論論集』（*Essays in Radical Empiricism*, 1912）として出版された。このなかでジェイムズは、純粋経験という概念を用いて私たちの経験と実在の本性を論じている。しかし、この概念については、ジェイムズ自身の論述の不明瞭さも相俟って、研究者間での共通の理解は得られていない。それゆえ、ジェイムズが純粋経験について何を述べており、何を述べていないのかを正確に把握するために、彼自身のテキストにいま一度立ちもどる必要がある。

こうした企図に基づいて、本発表では、『徹底した経験論論集』の第1章「意識」は存在するか（“Does ‘Consciousness’ Exist?” , 1904）を註解する。この論文は、同じ年に刊行が開始された哲学の専門雑誌『哲学、心理学、科学的方法雑誌』（*The Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods*）に掲載された。この論文は、純粋経験が明確に提示された最初のものであり、また、ホワイトヘッドがのちに『科学と近代世界』（*Science and the Modern World*, 1925）において、デカルトの『方法序説』に比肩するものと評価したことで知られる。なお、直後に発表された「純粋経験の世界」（“A World of Pure Experience”）はその続編であり、こちらの註解もまもなくおこなわれる予定である。

本発表における「意識」は存在するか」の読解を通じて、主に以下のことが明らかになる。

1. ジェイムズの意図が、主客の存在論的断絶の批判、とりわけ新カントの図式（形式／内容の峻別）の破壊にあること
2. この二元論批判というモチーフが論文全体を貫いており、純粋経験もそのための概念であること
3. 自己というものが経験同士の関係のひとつにすぎないとすることによって、『心理学原理』の自己論が、実在の分析にも適用されていること
4. 前半部で新カント派の二元論が批判され、後半部でデカルト的な二元論の境界がぼかされていること

こうして得られた成果は、ジェイムズの純粋経験概念について実りある議論をするための基盤となるとともに、より広く、私たちの住むこの世界の根本的なあり方を考察するうえで、重要な示唆ともなるだろう。

5. ボキャブラリーと「理性の公共的使用」

——いくつもの言語論的転回におけるローティの位置づけ

青木 崇 (学習院大学)

本研究の課題は、R. ローティのボキャブラリー論を、「理性の公共的使用」をめぐる 20 世紀的な再展開のなかに位置づけ、その意義と限界を明らかにすることである。R. バーンスタインも論じるように、「言語論的転回」は、『言語論的転回』(1967)以降、時代や国境を跨ぐ多様な「転回」を指す表現として用いられている(cf. *The Pragmatic Turn*, 211)。この観点からすれば、『哲学と自然の鏡』(1979)における言語論的展開への批判——「解釈学的転回」とも呼ばれる——も、『偶然性・アイロニー・連帯』(1989)などのボキャブラリー論も、いくつもの言語論的転回の一つとして、様々にその意義と限界を問われることになる。

こうした位置づけのうち、とりわけ注目に値するのが、政治哲学と言語論的転回の交差である。K. -0. アーペルや J. ハーバーマス、Ch. テイラーがドイツの言語哲学的伝統を捉え直し、言語論的転回と結びつけたことによって、この交差は決定的になった。そして、このような交差と照らし合わすとき、ローティのボキャブラリー論は特異な位置にあることが浮かび上がる。ローティと同様に、アーペル、ハーバーマス、テイラーは、意識や理性ではなく言語を哲学的な反省や解釈の対象として据えることによって、理解や思考が言語的であるがゆえに公共的であり、またローカルであることを注視する。この注視は、カントが「啓蒙とは何か」で示した「理性の公共的使用」の徹底という側面を帯びる。カントはこの概念によって自立的思考にとって公共的な議論が不可欠であることを訴えつつも、理性についてはあくまで非言語的な能動性として捉えたからである。ローティのボキャブラリー論は、このような「理性の公共的使用」の言語論的徹底と少なくない要素を共有しつつも、公共空間を「バザール」として特徴づけることによって、むしろ「クラブ」におけるボキャブラリーの私的な使用や創造を推奨する。また、「理性の公共的使用」は J. ロールズの『政治的リベラリズム』前後から、より明示的に、政治哲学のテーマとして注目され始めた。

「言語論的転回」をめぐる布置の一面を以上のように捉え直すことができるとすれば、ローティのボキャブラリー論は、「理性の公共的使用」の言語論的徹底という 20 世紀の議論において、どのような意義と限界をもつのか。本研究ではこの点を明らかにすることで、ローティのボキャブラリー論をいくつもの言語論的転回のなかに位置づける一助としたい。

6. 根源的实在論と超越論的心理学——真にプラグマティックなカント読解

中村 陽太（東京大学大学院総合文化研究科博士課程／日本学術振興会特別研究員 DCI）

現在のネオ・プラグマティズムにおいて、I. カントは確かな影響力を有している。しかしその受容は、主として P. F. ストロークソンと W. セラーズを介した見地に限定されている。ストロークソンは『純粹理性批判』から認識能力に関する心理学的主題を切り離して、経験の前提条件の「超越論的論証」を展開した。セラーズは知識の基礎を感性的所与に求める経験主義を「所与の神話」と批判して、あらゆる知識が「理由の論理空間」での理由を通じた規範的な正当化実践の内にあると主張した。

こうした見地に影響された反心理主義的かつ規範主義的なカント像を元にネオ・プラグマティズムを発展させたのが J. マクダウェルと R. ブランダムである。彼らは、客観的真理を問主観的合意へと還元する R. ローティへの批判的応答として、主体の規範的実践を経験の条件としつつも、客観的实在への接触を確保しようと試みる。その際彼らは、主体を認識能力によらずに合理的かつ規範的な「コミットメントとしての判断」によって説明し、客観的实在が既に概念的な構造を呈しておりその外部が存在しないという「概念的实在論」を提唱する。かくて、客観的实在が既に概念的な構造となっていることから、理由を通じた主体の規範的実践が客観的实在と接触し得るとされる。

本発表は、彼らの主張の根底にあるカント像を批判的に検討し、そのオルタナティブを提供することを目標として、ネオ・プラグマティズムでほとんど参照されてこなかった『判断力批判』を読解する。とりわけ本発表は、概念的に把握される以前に認識能力が客観的实在（自然）へと関与することが我々の経験に不可欠であると主張する。『判断力批判』では、自然が概念的に把握される以前の反省的探求に付随する「根源的な快」や、いかなる概念にも依存しないが認識一般に対して合目的な「構想力と悟性の調和的遊動」の分析を通じて、我々の通常の認識においても前概念的な自然に対する認識能力の関与が存するという描像が与えられる。この「根源的实在論」と「超越論的心理学」と呼ぶべき描像によって、反心理主義的かつ規範主義的なカント像が棄却される。

しかし本発表は、ネオ・プラグマティズムのカント像を否定するのではなく、より豊かにすることを目標とする。とりわけ、前概念的な自然の探求に関するカントの説は、C. S. パースや J. デューイの理論との親和性を有し、客観的实在の前概念的な関与がその概念的な把握を駆動するという探求の理論を与える。かくて本発表は、古典的プラグマティズムとネオ・プラグマティズムを繋ぐ真にプラグマティックなカント読解を与えるものとなる。

7. ナラティブの証言は何を伝えうるのか：
「どのようなことか」のスタンドポイント的な問答的知識

佐藤 邦政（茨城大学）

ナラティブの証言(narrative testimony)はこれまで、文学理論、医療、臨床心理、教育、歴史解釈といった諸実践に関する社会科学研究のほか、哲学・倫理学分野でも注目されて論じられてきた。特に、政治哲学やフェミニスト哲学では、ナラティブの証言が人々の社会的経験を共有し、権力による不正への抵抗という重要な役割を果たすことが指摘されている(e.g., Stone-Mediatore 2006; 2020; Young 2000)。たとえば、宮本(2020)では、第二次世界大戦中の広島と長崎に投下された原爆の被ばく者による語りを取りあげられ、日本と米国での受けとられ方の違いと理解の共有可能性が論じられている。

しかし、先行研究では、ナラティブの証言がどうして他者の経験の伝達・伝承という役割を果たせるのか——すなわち、なぜ他者の現象的経験を伝えうるのか——という問いや、そもそもナラティブの証言はいかなる固有の認識的特徴を持つのかという問いについては十分に検討されていない。

本発表の目的は、ナラティブの証言が、通常考えられている個々の命題的真理だけでなく、語り手のスタンドポイントから経験される「一連の出来事がどのようなものなのか」についての知識——すなわち、「どのようなことか(what-it-is-like)」のスタンドポイント的な問答的知識(erotetic knowledge)——を伝達しようと論じていることである。

現時点では、発表議論の構成は以下を予定している。第一に、ナラティブの証言の大まかな基本的特徴を示したうえで、ナラティブの証言に関する近年の認識論研究を検討し、フレイザー(Fraser 2021)が論じる「パースペクティブの共有」の議論において、ある出来事を表象する語り手のパースペクティブには、ナラティブの証言による伝達可能性の問題が残ることを指摘する。第二に、「どのようなことか」の知識に関する近年の研究(e.g., Cath 2024; Stoljar 2016)を踏まえて、ナラティブの証言が示唆するパースペクティブを、語り手にとって出来事がどのように経験されるのか——すなわち、語り手の「どのようなことか」——の知識の観点から分析し、パースペクティブは、部分的に、語り手の「どのようなことか」に関する命題的な形態で語られうることを示す。第三に、ナラティブの証言で伝達される命題的知識は語り手の「どのようなことか」に問答的知識であることを論証する。また、このナラティブの証言は、Young(2000)が示唆していた、語られている出来事に対する聴き手の想像力を賦活させようだろうということを示唆する。第四に、ナラティブの証言は、語り手のスタンドポイントの批判性と意味論的記憶の想起で利用される言語資源に応じて、聴き手自身が出来事を経験する場合には得られない出来事に対する新たなアスペクトを把握させようと論じる。

References

- Cath, Yuri (2024). *Knowing What It Is Like*. New York: Cambridge University Press.
- Fraser, Rachel (2021). "Narrative Testimony." *Philosophical Studies*, 178: 4025–4052.
- 宮本ゆき (2020). 『なぜ原爆が悪ではないのか：アメリカの核意識』。岩波書店。
- Stoljar, Daniel (2016). "The Semantic of 'What it's like' and the Nature of Consciousness." *Mind*, 125(500): 1161–1198.
- Stone-Mediatore, Shari (2006). *Reading across Borders: Storytelling and Knowledge of Resistance*. New York: Palgrave Macmillan.
- Stone-Mediatore, Shari (2020). "Storytelling / Narrative?" In L. Disch & M. Hawkesworth (eds.), *The Oxford Handbook of Feminist Philosophy* (pp. 934–954). New York: Oxford University Press.
- Young, I. Marion. (2000). *Inclusion and Democracy*. Oxford: Oxford University Press.

8. 環境プラグマティズムとヨナス——新しい環境倫理学の構築に向けて

久保 健太（京都大学大学院人間・環境学研究科 D1）

1970年代にアメリカで誕生した環境倫理学において、当初主流だったのは非-人間中心主義的な視点から自然保護の重要性を訴える立場であった。だが、その議論は手段/目的や人間/自然という二分法にもとづく高度に抽象的なものであったため、他分野との連携や現実社会への実効性に乏しかった。こうした状況下で1990年代に台頭してきたのが、①人間-自然の相互作用、②道徳的多元主義、③理論の実効性といった観点から環境倫理学を捉え直すべきだと主張する、環境プラグマティズムである。我が国の環境倫理学も、1990年代に加藤尚武によって紹介されて以来、加藤が主張するグローバルな方向と、鬼頭秀一の主張するローカルな方向に分かれて発展してきたが、2000年代になると両者はともにプラグマティズムに接近する。このように、日本においてもアメリカにおいても、環境倫理学はプラグマティックな方向への転換を見せてきた（「環境倫理学の実用論的転回」）。

ところが、2011年に発災した福島第一原子力発電所事故を経て、環境倫理学は新たな局面へと移行した。原発事故で明らかになったのは、科学技術という人間の行為が、同時代に生きる人々を越えて、遙か未来の人々にまで不可逆な影響を及ぼしうるという事実である。それに伴い、「人間とは何者であり、自然といかに関わるべきか」という環境プラグマティズムが一旦は退けた抽象的な問いを再考し、長期的な射程をもった理論を構築する必要性が生じてきた。

こうした環境倫理学をめぐる状況を踏まえ、発表者が焦点を当てるのは、ドイツに生まれアメリカで教鞭をとった哲学者・倫理学者、ハンス・ヨナス（Hans Jonas, 1903-1993）である。彼は、人間と自然の関係について射程の長い「未来倫理学」の構想を提示したことで知られる。本発表では、環境プラグマティズムとヨナスの思想をいくつかの観点から比較対照することによって、両者の意義と限界を浮き彫りにしてみたい。なお従来のヨナス研究では、彼の倫理学の自然哲学-形而上学的基礎づけが軽視される傾向にあった。ヨナスの主著『責任という原理』を監訳した加藤も、ヨナスの思想を環境倫理学の文脈に置き移す際、その存在論を切り捨てたという。だが発表者の見立てでは、彼の思想はその全体が有機的に連関している。そこで本発表では、未来倫理学の基礎づけをも含めて議論の俎上に載せることで、彼の思想をできるだけ棄損することなく、従来の二分法に囚われない、長期的な視座をそなえた実効的な環境倫理学の可能性を検討したい。

10. 孤立言語の問いに対するカヴェルの応答

笹倉 暢之（慶應義塾大学）

「孤立言語」の可能性の問題は、例えば次のような形で問われる。生まれてすぐに共同体から引き離され（無人島などで）孤立して生きる人間は、言語を話す（とみなされる）ことができるか。この問題は、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』におけるいわゆる「規則遵守についての考察」に関連して・それから派生して扱われがちであるように、規則に従う（とみなす）ことや言葉の意味の成立と、共同体の成員の一致との関係についての問題であると言える。またそれゆえ、言語をとりまくものを切り詰めて、言語そのものの本質や条件に迫ろうとするという点で、この問題は『哲学探究』の文脈からは独立に問われることもある。

本発表は、孤立言語が可能か否かという問題に直接に答えない。代わりに、孤立言語が可能であるとする一部の立場が共有している〈孤立した人間とその人間がしていることがわれわれに明白に知られる〉という図式を問題化あるいは相対化したい。そのためにスタンリー・カヴェルの哲学における中心概念やモチーフを引き合いに出す。

まず、孤立言語を巡る問題において問題となるのは人間性であるということを示す。言語の本質に関心があると言い切った議論でさえ、結局は人間が行為や発話で何かを表現しているということは前提となっている。したがって問題は、人間の行為をそれと認める規準、人間をそれと認める規準となる。ここでは、椅子を同定する規準において成員が一致する共同体が椅子を同胞に受け入れるわけではないように、共同体が一致することより人間の規準を適用できることこそが肝心である。

続けて、表現やそれが無力になる局面を人間の条件や孤立に結びつけるカヴェルの考えを取り上げる。カヴェルによってしばしば用いられる隔絶性という概念が、『哲学探究』に登場する孤立した子供についての解釈や、「知られざる女性のメロドラマ」とカヴェルが呼ぶ一群の映画に登場する女性についての解釈に展開する事情を確認する。こうして得られるのは、表現を持たない、奪われている、無視されているなどにより孤立した窮境にある人間のあり方、そうした人間のふるまい、そうした人間に対するわれわれの態度についての描像である。子供の沈黙を前に翻って自身が孤立する恐怖に耐えられない教師や大人に、孤立言語の想定における人間の表現を自明視する態度を重ねることができよう。孤立言語の問題に対する静寂主義こそ、人間の孤立状態を見据えた態度であると主張する。

II. スタンリー・カヴェルにおける二つの懐疑論の対比をめぐって

太期 勇斗

本発表においてはスタンリー・カヴェル『理性の呼び声』の読解を中心に、懐疑論の二つの主要な形式である外界の懐疑と他者の心の懐疑の比較検討を通して、これらの対比可能性とその含意を明らかにすることを目指す。一般に上記の二つの懐疑論は、前者が任意の外的対象において問題となるのに対して、後者が他者の心という外的対象とは異なる特異な存在者に焦点を合わせることで、それぞれ異なる次元の哲学的問題を引き起こすものとして区別されるが (e. g., Negel 1987)、その際これらは個別の問題を引き起こす以上必ずしも対比される必要がなくなり、それとして比較されることは稀である。カヴェルの懐疑論についての議論の特徴の一つは、日常言語の哲学が提供するような方法的批判などを通して、これらの懐疑論がそれぞれの仕方で個別の哲学的な問題を引き起こす前の地点に立ち戻ろうとすることにあるとよい。こうした彼の手続きから、これらの二つの形式を懐疑論として比較検討するための視座が得られる。

こうした彼の手続きをみるにあたって、本発表ではこれら二つの懐疑論の論証上の構造について確認した上で、とりわけそれらの導入として位置づけられる「事例」の果たす役割について検討する。一般に懐疑論においては、それをそれとして再認することに何ら困難のない類的な事例、たとえば鉛筆や蜜蝋といった物質的な対象、あるいは痛みや怒りといった他者の感覚・感情などの具体的な例を知っていると見えるための根拠が問われることから探究が開始されるが、その際こうした事例は、その問いに対して自らの感覚や他者の振る舞いといった根拠を引き出すための役割を担っているとさしあたりいうことができる。その後の過程で事例は「存在するもの一般」、「他者の感覚一般」へと拡張され、懐疑論は任意の事例において成立するものになるが、カヴェルによればこの過程が説得力を持つためには、その最初の事例は同時に私たちがもし何かを知っているとすればそれはこれであるという私たちの感覚を捉えることのできるような最良の事例でもなければならぬ。ここから二つの懐疑論の対比の可能性の一つを見ることが出来る。つまり、外界の懐疑においては物質的実在をまるごと凝縮させることのできるような代表的な事例を選び出すことに困難がないのに対して、他者の心の懐疑においては何がそのような事例なのかを決定することに原理的な困難が付きまとうのである。以上の議論の過程をさらに詳しく論じた上で、本発表においてはさらに、そうした最良の事例の選定の困難にもかかわらず、他者の心の懐疑が外界の懐疑に比べて逆説の深みに欠けると私たちに感じられる理由とその含意を、他者の心の懐疑にはそれにとって代わるような競合する選択肢が私たちの日常や常識において存在しないというカヴェルの主張を手引きに明らかにすることを目指す。

12. 「分断」が叫ばれる時代における利他教育とは ——カベルとレヴィナスにおける懐疑主義と他性を踏まえて——

井川 雄一郎（京都大学教育学研究科修士課程臨床教育学コース1回）

本発表の目的は、分断社会への一つの応答として正しい規範を押し付ける完全主義に陥らない利他教育のあり方を提唱することだ。近年、香川県の利他学園の実践に見られるように、教育実践においてしばしば、利他的な態度の涵養を強調する。しかしその理念が「正しさ」の完全主義と結びつくとき、それは他者の沈黙や多様性を抑圧する方向へと転化する危険を孕むのではないか。とりわけ、教育者が「正しさ」を所与のものとし、生徒に授けるなら、むしろ生徒の個別性を否認する可能性がある。このように完全主義に陥らず、どのように他者性への志向を保ちつつ、それが規範的暴力にならない教育のあり方を構想できるかが本発表の中心的課題である。

本課題への手がかりとして、スタンディッシュによるカベルとレヴィナス論を手がかりに、この仮説を検証していく。スタンディッシュによれば、レヴィナスとカベルはいずれも、他者を知りうる仕方には限界があり、こうした限界を越えようとする試みには、ある種の暴力性が伴うという点で一致している(Standish, 2007, p. 78)。しかし、その応答の仕方には決定的な違いがある。レヴィナスは、懐疑を歴史的・宗教的な危機と捉え、それを生き延びることで人間や文明の成熟が可能になるとする(Standish, 2007, p. 88)。この視座では、懐疑は克服されるべきものであり、その超克によって真の倫理的関係が実現されると考えられている。一方カベルは、懐疑は繰り返し現れる日常的な出来事であり、それに応答し続けることが倫理の実践であると考え(Standish, 2007, p. 89)。つまり懐疑は克服されるべきものではなく、応答し続けるべきものとして位置づけられる。教育において利他性を構想する際、この差異は重要な手がかりになる。善を一元的に与える教育ではなく、応答のズレを認めつつ、他者との関係に開かれ続ける教育こそが、利他性の理念を押し付けない教育だと考えられるのではないか。懐疑への応答の仕方は、教育のあり方そのものへの問いであるはずだ。

本発表の手続きとしては以下の通りだ。(1) 現代教育における実践の文脈に基づき、利他教育における「規範の押し付け」という現代的問題を提起する。(2) 理論的背景を探るため、懐疑への応答におけるカベルとレヴィナスの差異を分析し、人々が完全主義に陥るあり様を分析する。(3)最後に「分断」社会において分断を加速させず他者との共生社会の実現に資するような新たな利他教育の枠組みを提示する。

参照文献

・学校法人利他学園. 学校概要 | RITA 学園高等学校. RITA 学園高等学校.

<https://www.rita.ed.jp/outline/> (2025年6月30日閲覧)

・Standish, P. (2007). Education for grown-ups, a religion for adults: Scepticism and alterity in Cavell and Levinas. *Ethics and Education*, 2(1), 73–91.

<https://doi.org/10.1080/17449640701304117>

本稿では原著 p. 78、88–89 を参照しつつ、ポール・スタンディッシュ著／齋藤直子監訳『過剰な思考：ポスト構造主義と教育』（法政大学出版局より出版予定）の日本語訳を参考にした。

13. 恐怖のリベラリズムの見落とされてきた要素：

ジュディス・シュクラの民主主義的エートス論

矢端崇（国際基督教大学大学院 博士後期課程所属）

本発表の目的は、20 世紀アメリカの政治理論家ジュディス・シュクラが独自の政治理論である「恐怖のリベラリズム」を展開する際に述べている「民主主義的エートス」論を再構成することである。

恐怖のリベラリズムとは、シュクラが論文「恐怖のリベラリズム」(1989)で展開した政治理論である。このリベラリズムは、政治が達成すべき理想状態を提示する政治理論と異なり、「最高悪」の回避を第一目的としていることに特徴がある。ここでの最高悪とは、政府・富者・男性・マジョリティーといった強者が市民・貧者・女性・マイノリティーといった弱者に与える意図的な苦痛のことである。

この苦痛が生み出す恐怖の防止を求める点で、恐怖のリベラリズムは、他者からの介入の不在を自由の定義とする、アイザア・バーリンの「消極的自由」との類似性を指摘されてきた。しかし、シュクラ自身の考えでは、両者の間には大きな違いがある。その違いとは、後者が法の支配をはじめとする自由の成立に必要な不可欠な諸条件に十分な注意を払っていないのに対して、前者はこの諸条件抜きに自由は成立しえないと考えていることである。そして、その諸条件に、シュクラは民主主義的エートスを含めている。

シュクラが恐怖のリベラリズムとの関連で民主主義的エートスについて論じているのは、論文「リベラルの伝統における権利」(1992)においてである。一般的に、エートスはある共同体で醸成され共有されている価値観やそれに基づく態度を指すが、シュクラはこれをリベラル・デモクラシーの維持のために市民が体現すべき価値観や態度として用いている。シュクラによれば、市民は民主主義的エートスを体現し、恐怖を生み出す社会的不平等の是正のために能動的に活動しなければならないのである。

しかし、シュクラはこのエートスを上記の論文で詳しくは論じておらず、その内容は不明である。とりわけ、「なぜ市民はこのエートスを体現する義務を有するのか」は真っ先に問われるべき疑問である。そこで、本発表では、恐怖のリベラリズムにおける民主主義的エートス論を市民の義務の根拠との関連でシュクラのさまざまな著作から再構成することを試みる。

シュクラはここでリベラル・デモクラシーが抱える難問に取り組んでいると考えられる。その難問とは、リベラル・デモクラシーの維持には市民の能動的な政治参加が必要だが、現代の多元主義的・個人主義的な社会では市民に政治参加の義務を課すことは何らかの共通善を前提するように思えるため困難になるというものである。民主主義的エートス論の再構成はこの難問に対するシュクラの考えを理解することに寄与する。

14. Coloring reality under the specter of social imaginary:

The epistemological argument contra pragmatism

RODIS Fotios (PhD and postdoctoral researcher in Philosophy, Kobe University)

The aim of the hereby study is to approach the fundamental epistemological question concerning the source and practice of human understanding on empirical and scientific reality. The triggering questions lie with the following topics: firstly, how human understanding receives and interprets the empirical stimuli received from its external environment; secondly, how criteria, based on which reality is interpreted, are determined, in order to articulate the human epistemological capacity; and thirdly, how this interpretation affects the reality faced by general and scientific praxis.

Tending towards a possible answer, this paper adheres to the following ontological milestones: primarily, that any empirical stimuli is given meaning – thus, colored – only according to the philosophical categories applied to each society; that, consequently, the social historical organization forms respectively the human own-world – else, its *Eigenwelt* – that determines as perceivable reality only the part that colors as meaningful, beyond which natural reality is rendered non-observable; and, finally, that this same signification of meaningfulness inscribes the concept of human knowledge on any reality – even scientific. Thus, an anti-pragmatism argument is demonstrated, based on which reality is perceived according to the social categories in and by a specific collectivity during a specific historical point.

In the first section, traces through an indicative historical retrospect are drawn, ranging from the empiricism of Locke, Berkeley and Hume to Kant. In the second section, the theory of the human world as fundamentally social-historical is discussed, as proposed by C. Castoriadis and his concept of social imaginary. Finally, in the third section, conclusions are drawn based on the ontological impact of the social human world on general and scientific knowledge, seen through its effect on traditional philosophical presuppositions.

**15. Hippie's "Aspiration" and a Critical Examination
of Emerson's Concept of "Aversive Thinking"**

YAN SHUNING (京都大学臨床教育研究科)

Social phenomena "lying flat" and "tangping" in Chinese society show a growing sense of nihilism. In other words, a loss in pursuing "ambition". This reflects a broader erosion of democracy – Deweyan democracy – democracy as a way of life. To rectify this sense of loss. This paper rethinks the notion of "having ambition" or "aspiration". Rather than understanding ambition in utilitarian or achievement-oriented terms, but a form of ambition that processes emotion, feelings through language and thinking, which can resist existing norms and challenge established social regulations. This ambition/aspiration I referred to can be illustrated by the Hippies' spirit. By analyzing the Hippie movement to see the forces of refusal of ambition/aspiration, and to see the emotional dimension that was lost in today's democracy. Then I examine Ralph Waldo Emerson, as his interpretation of aspiration not only underpins the ethos of the Hippie movement but also offers a crucial lens for the articulation of new conceptual frameworks of ambition/aspiration. First, by drawing on the aspiration of Emerson's thought and criticizing the limitations of his aversive thinking, this study attempts to find out a new way in which one relates her/himself to society. Finally, this paper attempts to redefine ambition and aspiration and reconsider the meaning of a rebellious spirit as a pathway toward achieving a creative democracy that remains still to be realized in modern society – which John Dewey once called "democracy as a way of life."

【自主企画パネル概要】

1. パースの指標概念の現代的応用～生態心理学、メディア論、人類学の観点から

提題者

佐古仁志（東京交通短期大学）

谷島貫太（二松学舎大学）

野澤俊介（北海道大学）

加藤隆文（大阪成蹊大学）

本企画パネルでは、さまざまな学術領域におけるパースの指標概念受容について考察したうえで、その現代的な展開の可能性について検討する。

指標は、パースが対象と記号との関わり分類として提案した三つ組み、図像（アイコン）、指標（インデックス）、象徴（シンボル）のひとつであり、記号と対象の因果性を示すものと考えられている。このような指標概念は、メディア研究では物理的痕跡性の観点から、写真および映画メディアと現実との連続性や因果性の説明に利用されている。また、言語人類学や社会言語学では、社会的指標性という観点から発話をめぐるポジショナリティの説明に用いられている。ただし、ほかの分野での使用も含め指標概念はかならずしも一致しておらず、指標をめぐる対話がなされているとはいいがたい状況にある。

そこで本企画パネルでは、指標概念について、パースの議論へとさかのぼり検討すると同時に、環境のなかに位置づく身体性への準拠という観点を加えることで包括的な指標概念の検討を行う。

佐古の発表では、パースの指標概念の変遷と分類についての考察を行う。そのうえで、指標概念の持つ个体化＝特定化の機能に注目し、身体性への準拠という観点から生態心理学への展開を試みる。具体的には、パースの指標概念が、パース自身の量子子への理解とともに 1880 年代に変化したことを踏まえながら、指標概念の特徴について Atkin (2005) を検討する。そのうえで、指標概念の重要な特徴の一つとしての个体化＝特定化に注目し、生態心理学へと展開し、学習の場面での指標概念の働きについて考察する。

谷島の発表では、パースの指標概念を、単なる記号分類から「世界構成的な出来事」として再解釈することを試みる。まず、指標を主体が現実と接触し、その抵抗を感じる根源的な出来事として再定義する。次に、この出来事が既存の世界観(参照系)を揺るがし、アブダクティブに更新を迫る場合を「genuine な指標」、参照系をただ確認するに留まる場合を「degenerate な指標」として動的に区別する。加えて、この区別の核心にアイコン（図像）の働きを位置付ける。Genuine な指標において、出来事が持つ質的な様相（アイコン）は、それを説明するための新しい仮説を形成する「アブダクションの触媒」として機能する。アイコンこそが、単なる衝突を創造的な世界構成へと導く。このモデルの提起を通じて、指標概念の持つ動的で認識論的なポテンシャルを提示するとともに、メディア研究における指標概念の適用の可能性を拡張することを試みる。

野澤の発表では、言語人類学におけるパースの指標概念の役割について概説し、記号の物質性および接触の様相をめぐるここ数十年ほどの研究に焦点を当てることで、記号の出来事の研究における指標概念の分析的ポテンシャルを再提示する。（象徴）人類学などにおいて「モノは記号である [=なにかを表象する] こと」は安易に理解される一方で「記号 [出来事としての表象=sinsign]がモノであることは

看過される」傾向を批判的に指摘した Hull (2012:13)などを参照しつつ、指標記号の身体や社会関係への影響を規定する記号イデオロギー（メタ指標過程）について、いくつかの事例とともに考察する。

加藤の発表では、パースの指標概念と類像概念に特に注目していわゆるマルチ・スピーシーズ人類学の潮流の先鞭をつけた文化人類学の論考に着目する。Kohn (2013)は、パースの記号論を参照しながら、人間的なものを超えた人類学を提唱する。その中で、類像記号は、互いに異なるもの同士の特定の類似点に着目し、差異をあえて無視することにより、一般性を導きだす記号であると説明される。さらに指標記号は、物理法則などの実在的な結びつきによって対象を指し示す記号であることから、環境という実在の世界に記号使用の主体を根付かせる働きがあると考えられる。人間を含む生物は、このように類像記号や指標記号を駆使して適応的な実践を打ち立ててきたのであり、学習や言語使用といった人間的な諸実践においてもまた、パースの記号論を介することで、人間的なものを超えてゆく創造的な側面が明らかになるのではないか。——こうした見通しのもと、本企画パネル全体として、指標概念の現代的意義を問い直したい。

Atkin, A., 2005. "Peirce On the Index and Indexical Reference". *Transactions of The Charles S. Peirce Society*. 41 (1), 161-188.

Hull, Matthew S. 2012. *Government of Paper: The Materiality of Bureaucracy in Urban Pakistan*. Berkeley: University of California Press.

Kohn, E. 2013. *How Forests Think: Toward an Anthropology Beyond the Human*. University of California Press.

本研究は 2025 - 2027 年度文部科学省基盤研究(C)「パースの指標概念の変遷と応用：メディア研究と言語人類学の系譜の検討を通して」(代表：佐古仁志、課題 番号 25K03670) による助成を受けたものです。

2. 〈ドゥルーズ・プラグマティズム〉の可能性：すれ違いから創造的接続へ

朱喜哲（大阪大学 社会技術共創研究センター）

白川晋太郎（福井大学 教育・人文社会系部門 教員養成領域社会系教育講座）

得能想平（奈良先端科学技術大学院大学 デジタルグリーンイノベーションセンター）

西川耕平（国際医療福祉大学 成田キャンパス）

従前、いわゆるフランス現代思想とアメリカ哲学とはそれほど恵まれた関係性にはなかった。『脱構築とプラグマティズム』やデリダ-サル論争など、いくつかの契機はあれど、それらはむしろ問題構成や用語法の「すれ違い」こそが、最大の見どころになっている感は否めない。

ところが近年ドゥルーズ研究の動向として、その哲学の「プラグマティズム言語哲学」としての特徴と影響関係の捉えなおしが進み、あらためて生産的な議論の土壌が整いつつある。本企画パネルでは、こうした動向も背景に、アメリカ哲学、とりわけプラグマティズムの流れを汲む言語哲学の研究者2名とドゥルーズ研究者2名とが協働し、両者を架橋する可能性を検討する。以下、4名の報告事項について、概要を紹介する。

朱は、現在のドゥルーズ研究からプラグマティズムに寄せられる関心動向を紹介するとともに、とりわけ従来「対立的」ないし「すれ違い」の最たるものとされてきた、ドゥルーズとローティの相互言及の検討と両者の哲学の差同を明らかにする。指摘したいのは、言葉尻上の対立とは裏腹に、両者にはまず哲学の役割としての「再記述（ローティ）」「最領土化（ドゥルーズ）」という共有されうるモチベーションがある。また、両者は政治哲学においても「マジョリティ」性に着目する点で重なる関心を有している。しかし、やはり明確な対立点も存在する。それはちょうど「マジョリティ」をどう位置づけ、評価するかという論点に関わっている。本発表では、両者の政治哲学的構想を「ふたつのマジョリティの哲学」として一種の補完的な関係にあるプロジェクトとして再定式化をおこなう。

得能は、『千のプラトー』の第四プラトーと第五プラトーに見られる言語論を確認する。一般的な行為と言語行為を横断して対象とする「非物体的変形」というキーワードを中心に、ドゥルーズ＝ガタリにおける言語論を行為論との関係において位置づけ、ドゥルーズ＝ガタリの言語論的背景、オースティン、サル、グライスなどの英米圏の言語哲学との接続、および言語行為を取り巻く社会構造を分類する「記号の体制」という着想について確認したい。

白川は「プラグマティズムには健康さへの志向がある」というドゥルーズ研究者のコメントに触発され、アメリカ哲学において（おそらく）無自覚に共有されている「健康志向」を抽出し、反省的に検討する。具体的には、「実践重視、進歩主義、可謬主義、反懐疑論、反形而上学、柔軟性」を特徴とするプラグマティズム、「明晰さ、論理性、わかりやすさ、シンプルさ、競技性」を志向する分析哲学、そして「合理的で常識的な他者をしばしば前提とする」言語哲学を取り上げ、これらが一様に「健康的」であることを指摘する。さらに、このように健康的な哲学にいまいち乗り切れず、密かな反発を抱く者たちによる「不健康なアメリカ哲学」の可能性を提示し、その独自の魅力と哲学的意義を明らかにする。

西川は、ブランダム論の推論主義にドゥルーズ＝ガタリの言語論ならびに生成変化の議論を接続することを通して、それぞれの哲学を相互に補完することを試みる。ブランダム論の推論主義において、「理由の空間」は規範的な言説実践を成立させる場であり、私たちは基本的にその住民である。他方で、ドゥルーズ＝ガタリはむしろ規範からズレるマイナーな言語使用に着目し、そうした実践こそがメジャーで規範的な体系自体に生成変化を促すと論じる。安定した「理由の空間」が揺さぶられるのはいかにしてか、

ドゥルーズ＝ガタリはその条件を提示しているとみなしうるだろう。反対に、そのようにして生じた変容が、どのようにして正当化され、受け入れられるかをドゥルーズ＝ガタリが明確に示しているとは言い難い。これは、ブランダムのコミットメントや承認の議論を用いることで具体化することが可能だろう。こうした試みを通して、両者の哲学それぞれの有するポテンシャルを示したい。